

Safety Info. インフォメーション

日本交通心理学会が
高校生による交通安全の研究を表彰

日本交通心理学会では、交通場面における人間の行動に関心を寄せ、学習・研究を行った高校生の成果を評価し、優れたものを表彰している。2026年度は小川茉莉さん(日本女子大学附属高等学校)と、小嶋悠生さん・小倉隆太郎さん・小谷悠介さん(東海学園高等学校)のグループが優秀研究賞を受賞した。高校生が手がけた2つの研究を紹介する。



日本女子大学附属高等学校(神奈川県川崎市)2年生の小川茉莉さん

運転ミス後の行動に着目した
交通事故要因の研究

小川さんは、小学生の時に友人が交通事故に遭った現場を目の当たりにした経験があり、これを契機に交通事故防止の重要性を強く意識するようになったという。

高校生になった小川さんは、交通事故のニュースを耳にするたび「なぜ繰り返されるのだろう」と疑問を抱くようになり、「事故を防ぐために必要なことは何か」を究明しようと、交通事故に関する統計や専門家の論文を調べ始める。さらに、(公財)交通事故総合分析センターや大学の研究者、弁護士のもとに自ら足を運び、ヒアリングも行った。こうした活動の中で日本交通心理学会のことを知り、同学会の高校生表彰に応募したそうだ。

「交通事故の問題を心理学的な視点から考えてみることは、とても興味深いと思いました」。応募したテーマは「運転ミス後の行動に着目した交通事故要因の研究」。交通事故が発生する要因を単なる運転操作のミスとして捉えるのではなく、ミスをした後の認知と行動に着目したのである。

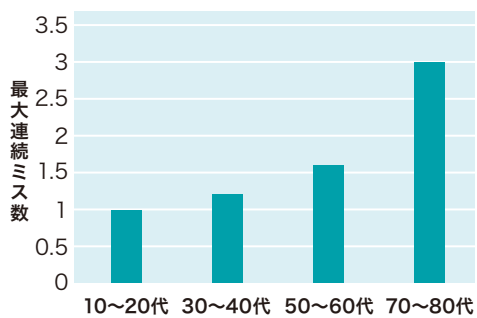
「アクセルとブレーキの踏み間違いなどの操作ミスは高齢者に特有のものと思われがちですが、どの年齢層でも発生しています。にもかかわらず、高齢者の事故は重大な結果につながる

りやすいのは、ミスの発生そのものではなく、ミス発生後の対応に違いがあるのではないかと考えました」。

人はミスにどの程度素早く気づき、適切に修正できるのか、小川さんは年齢層による違いを明らかにしようと10～20代、30～40代、50～60代、70～80代の各年代5名ずつ計20名を対象に実験を行った。

実験に使用した「認知反応テスト」(左下)は、小川さんが情報の授業で習得した知識をもとに作成。「左(青)」「右(赤)」2つの操作領域を設け、それぞれを自動車のアクセルおよびブレーキに見立てている。操作領域の上に、赤または青に着色された○または×をランダムに表示。被験者は、赤の場合は「右(赤)」、青の場合は「左(青)」を押すという判断に、○なら右手、×なら左手で操作するという条件を加え、複数の判断を同時に求めることで、認知的負荷が高い状況を再現している。

●年代別最大連続ミス数

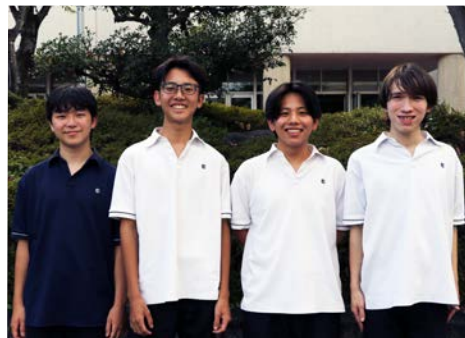


実験の結果、ミスの発生回数は10～20代が平均約1回であったのに対し、30～40代では約2回、50～60代では約3回、70～80代では約6回と高齢層ほどミスの回数が増加した。さらに、最大連続ミス数は10～20代および30～40代では主に1回であったのに対し、50～60代では2回、70～80代では3回以上となるケースが確認され、高齢層ほど誤った操作が連続して行われやすい傾向が見られた。「人間は年齢にかかわらず誰でもミスをします。交通安全対策においては、ミスの発生を完全に防ぐのではなく、ミスをしてそれが事故につながらないようにできるかという視点で対策を考えることが重要です」と小川さんは今回の研究を結論づけた。

「私の祖父母は地方で暮らしていて、クルマが運転できなくなると買い物や病院に行けなくなってしまう。だから、同じような境遇の高齢の方々には運転を続けてほしいと思っています」と、小川さんは高齢者が長く安全に運転できる交通社会にするための模索を続けていく考えだ。

自転車乗車時の
ヘルメット着用促進に関する研究

小嶋さん・小倉さん・小谷さんのグループのテーマは「自転車乗車時のヘルメット着用促進に関する研究」。この研究は自転車で通学している小嶋さんのある疑問から始まった。小嶋



東海学園高等学校(愛知県名古屋市)2年生の(左から)小嶋悠生さん、小倉隆太郎さん、小谷悠介さん、マーデン瑠生さん

さんは、自転車に乗り始めた幼少期から両親のすすめでヘルメットを着用している。しかし、通学時に周囲を見渡すと、ヘルメットを着用していない生徒が多いことに疑問を感じたという。「どうすれば、みんなにヘルメットをかぶってもらえるか考えてみようと思いました」と小嶋さんは振り返る。

小嶋さんらはGROWモデルと行動変容ステージモデル(図1参照)をもとに、ヘルメットに無関心な生徒への啓発を検討。2025年10月からヘルメット着用率調査、警察署などへの訪問、着用を促すためのクイズや動画の制作などに取り組んだ。

ヘルメット着用率調査は、同校で登校時に自転車通学者のヘルメット着用状況を計測。着用率は6.8%(3日間の平均)と、愛知県内における高校生の自転車死傷者のヘルメット着用率11.0%(2024年・愛知県警察本部調べ)を下回る結果となった。その後、地元の天白警察署や、近隣の大学で交通安全啓発を行うボランティアサークルを訪ね、着用促進の取り組み、ヘルメットの正しいかぶり方、啓発の方法と内容などをヒアリングした。ここで学んだ知識を活用し、クイズと動画を制作したのである。クイズは1年生(現2年生)を対象にホームルームの時間に実施した。「一方的に知識を与えるのではなく、ヘルメット着用について一人ひとりに考えてもらう機会をつくりたいと思い、クイズを取り入れました。問題は、着用の重要性や正しいかぶり方を理解できるものにしていきます」と小倉さんは話す。動画は東海学園高等学校の公式Instagramに公開。45秒のショート動画で、ヘルメット非着用の危険性を伝えた。

●図1



●クイズの内容

問	レベル	問 題
1	Lv.1	サイズが合っていないヘルメットが危険な理由は？
2	Lv.2	自転車事故で重い怪我が多いのは、どこ？
3	Lv.3	夜道で少しでも安全性を上げたいとき、有効なのは？
4	Lv.4	ヘルメットをかぶる位置として正しいのは？
5	Lv.5	あごひも(ストラップ)の適切なゆるさは？
6	Lv.6	本校の自転車通学者のヘルメット着用率は？
7		クイズの手応えはどうでしたか？

2026年3月には啓発活動の効果を検証するために、1年生にアンケート(任意)を行った。回答者のうち自転車を利用している生徒のヘルメットの着用率は16.5%にとどまった。「まったく着用していない」「ほとんど着用していない」と回答した生徒には「かぶらない理由」と「どうしたらかぶるか」を尋ねている。「かぶらない理由」を整理すると、「美意識(グサイ・髪が崩れる・デザイン)」「不快感(邪魔・身体的不快)」「持っていない」「周囲への同調」「自信がある」「無関心」の6つ。「どうしたらかぶるか」は「デザイン(見た目・利便性)」「金銭的問題(価格)」「雰囲気」「外発的動機付け(法律・スケアード教育)」の4つに集約された。クイズや動画の介入効果を分析すると、動画の視聴(受動的な情報接触)には有意な効果が見られなかったが、クイズ参加(能動的な関与)は有意にヘルメット着用への興味を高めたことがわかった。

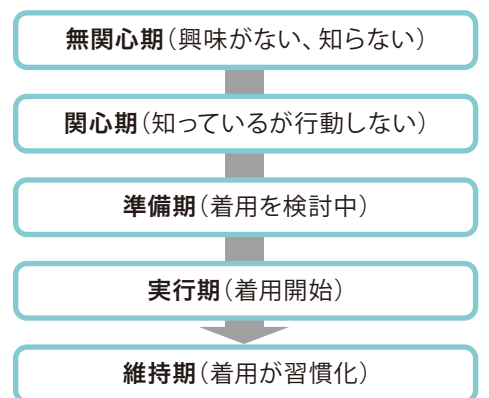
心理学に興味があり、小嶋さんと小倉さんの研究に参加したという小谷さんは「興味は持ってもらったものの、着用には至っていません。かぶらない人が多数の中では、着用して『変わってるよね』と思われる不安がある人もいるでしょう。どのような介入をすれば行動変容につながるか、それを検討することが今後の課題だと考えています」という。

2026年度からはマーデン瑠生さんと櫻木乙矢さんが加わり、5名で研究を継続している。「協力してくれる仲間が増えたのは優秀研究賞の受賞と同じくらいうれしく、ヘルメットに対する関心を高めるという意味では取り組んで良かったと思っています。着用率の向上をめざし、みんなで効果的なアプローチを検討しているところです。新体制でも受賞できるようにがんばります」と3人は今後の抱負を語った。

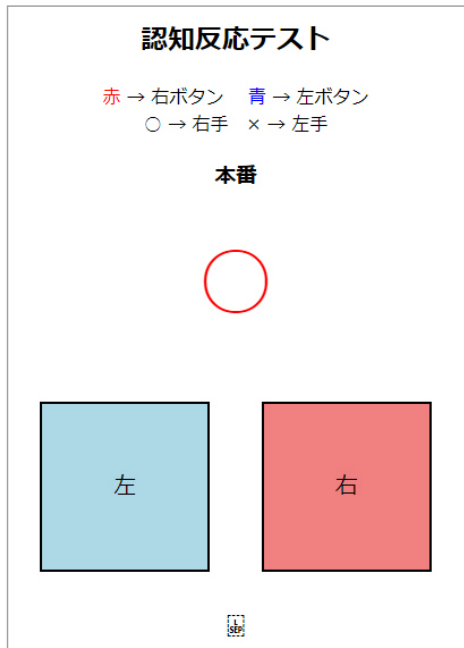


ヘルメット着用を啓発する動画を東海学園高等学校の公式Instagramに公開

行動変容ステージ※



※Prochaska & Velicer, 1997



「認知反応テスト」ではタブレットの画面サイズや操作環境の違いが結果に影響しないよう同一の端末を使用(2回の練習の後に本試行を24回実施)